

# 第2回統合型リゾート（IR）道民セミナー

## 第2部

日時 平成30年2月2日（金） 15:00～17:00  
場所 TKP札幌カンファレンスセンター  
カンファレンスルーム  
（札幌市中央区北3条西3-1-6札幌小暮ビル）

（司 会） 続きまして一般社団法人ギャンブル依存症問題を考える会代表、田中紀子様より「有効なギャンブル依存症対策とは？ - 現場からの報告 - 」と題しまして、ご説明のほういただきます。田中様につきましては、東京都ご出身でございまして、祖父、父、夫がギャンブル依存症者という三代目ギャンブラーの奥様ということで、ご自身もギャンブル依存症と買い物依存症からご回復をされたご経験をお持ちでございます。2014年にはですね一般社団法人ギャンブル依存症問題を考える会代表理事にご就任をされてございます。それでは田中様よろしくお願いたします。

（田中 紀子） はい、よろしくお願いたします。皆さんこんにちは。

（全 員） こんにちは。

（田中 紀子） ギャンブル依存症問題を考える会の田中と申します。今日は平日これだけたくさんの方にお集まりいただきましてありがとうございます。今日はですね、北海道にIRぜひ推進したいなと思っていられる方がたくさんいらっしゃるのかなとも思いますけど、中にはね、絶対そんなカジノなんて来てもらったら困るということで、ご心配で来られている方とかもいらっしゃるかなというふうに思います。で、私たちもですね、このギャンブル依存症のことずっと取り組んできたんですけども、この、にわかにはですね、カジノの問題が出てから大忙しになりまして、まさかこんなことになるとは思わなかったっていうような状況で、あのうちの団体を作ったんですけども、ま、賛成の皆さん、反対の皆さん。色々ご主張があって、私達はカジノに対して賛成でも反対でもありません。ただギャンブル依存症対策っていうことをカジノがあろうがなかろうが、ちゃんとこの国に浸透させたいなと思って活動しています。で、賛成の先生方とか、賛成の皆さんのおっしゃることというのは、カジノを機に依存症対策をしっかりやります、みたいなことを言うんですね。しっかりやりますと言ったって、しっかりどうやるんですかっていうところの、その、しっかりやる中身が大事なんですけども、そのしっかりやるっていう中身がちっとも出でこないんで私達は不安なんです。で、しっかりの中身がどうですかっていうと、みんな誰も分かっていないから、答えてもらえないみたいな状況になっているんですね。で、反対派の人達の言い分というのは、いやいやカジノなんか作って、ただでさえギャンブル依存症が日本は多いのに、カジノができて、益々ギャンブル依存症ができれば困るから、カジノなんかいない、みたいなご主張をされる人がいらっしゃるんですね。でも、そういう方たちはカジノを潰しました、この話を潰したとしたら、ギャンブル依存症対策に貢献してくださるんですかって言ったらそんなことないですよ。カジノ潰して終わりみたいな感じで。じゃあ、私達全然助からないじゃんというところ

もあってですね、賛成、反対、どちらの主張をされる方も、ほんとにギャンブル依存症のことを考えていただいているんでしょうかっていうようなところは、ちょっと私達思っているところなんです。で、その、がみがみ反目しあうものではないっていうふうに思っていて、ギャンブル依存症対策というのは、もちろんカジノをやりたい、やりたくないっていう人達のご主張の中に出てくるものなんですけれども、でも社会のために、これを作ることが絶対良いことになるんだよということを、是非知っていただきたいなというふうに私達は思っているんです。それと、やっぱりギャンブル依存症というのは、すごく知られてない、本当のこと知られてないがために、なんかすごくこう、怖いものとか、恐ろしいものみたいなことで、この間も昨日もですね、NHKでニュースにですね、大阪府が、まあ大阪府色々アピールしたいわけですね、カジノ誘致したいから。ギャンブル依存症対策これだけやりますみたいなことを、どんどん先駆けてアピールしたいというのがあるんですけれど、その中で高校生からギャンブル依存症の予防をいれます、みたいな。学校に入れますみたいなことを言われたんですね。その記事の中にギャンブル依存症というのは、こんなに恐ろしいものだから、ギャンブル依存症の恐ろしさを伝えますみたいなことが書いてあったんですね。で、それやめてほしいと思ったんです。ギャンブル依存症恐ろしいものみたいになったら、私達、私もギャンブル依存症でしたし、私の夫もギャンブル依存症だった。でもそこから回復してきたんですけど、なんか社会からどんどん排除されちゃうし、家族の人達も困っていても、もうそんなこと世間に何を言われるか分からないと思って相談もできなくなっちゃうんですね。だから、正しい情報を伝えてほしいということで、もう速攻ですね、維新のですね馬場幹事長に電話をしてですね、いや、大阪こんなことね教育されたら困りますと、で、ちゃんとね私達が伝えてほしいのはギャンブル依存症というのは回復できる病気なんだと、もし、周りの人達にそういう人達がでたら、周りの人はどういうふうに対応したらいいのかとか。あとですね、もし、そんなことがあった時に、じゃ何処に相談に行けばいいのか、そういうような事をちゃんと予防教育で言ってほしいんですよということを言って、私達が要望書を出すから、それをね受け取ってくださいって言って、でも幹事長じゃなくて松井知事が良いなみたいな事を言ってですね、それでですね、さっき馬場幹事長の秘書さんからですね、どういう内容のが出てきますかみたいな感じで、あの要望書を先に送ってくださいみたいな電話がかかってきてですね、はい、わかりましたみたいな、ほんとはまだ作ってないんですけど、今から送りますなんて言って、まだほんとはこれから作るんですけど。そんなことやってます。で、そういうですね、間違ったことでどんどん怖い

ものというふうに触れ回られているようなところがあってですね、特にですね、反対しているお気持ちは分かるんですけども、その人たちが、なんか本当に、ギャンブル依存症撲滅みたいになるとですね、私たち生きてちゃいけないんじゃないかみたいな感じで、どんどん追い詰められているので、その辺の表現の仕方とか、そういったことにも是非ですね、今日の短い時間ですけども、知っていただけたら凄く有難いなというふうに思っております。

先ほど、司会の方がおっしゃっていただきましたけれども、私は、祖父、父、夫がギャンブル依存症というですね、三代目ギャン妻と言っているんですけども、それで、三代目ギャン妻の物語という本も出したんですけど、三代目のギャンブラーの妻です。そしたらですね、みんなこう言うわけですよ。お父さんも、お爺ちゃんも、そういう環境に育って学ばなかったのみたいなふうと言われるんですけど、皆さんそう思いますよね。何でまた、好き好んでギャンブラーと結婚したのって。じゃ、なんでそういうふうになっちゃうのかというようなことも含めて、少し私の経験も含めて、ギャンブル依存症ってどういうことなのかということをお伝え出来たらなというふうに思っております。

では、簡単に、行動依存についてお話させていただきたいのですが、依存症で有名なのは、一番有名なのは、アルコール依存症ですよ。マスコミで騒がれるのは、ギャンブル、薬物依存症、だいたい。昨日も、大竹まことさんの長女かなんかが捕まってですね、ちょっと騒ぎになりましたけれども、この物質依存というもの、何となくみんな、依存症になっちゃうってのが分かるじゃないですか。そもそも、その体に取り入れている物質自体に依存性があるから、やめられなくなるんだよねってところ、何となく分かりますよね、この中で、タバコを止めた経験のある方いらっしゃいますか。何人かいらっしゃいますね。ありがとうございます。やっぱり止めた当初って、すごく辛かったと思うんですね。で、飲み会の席なんかに行くと、うーっ、みたいになっちゃったりってことがあって、それ何となくイメージできると思うんですけど、それと全く同じことなんです。でも、ギャンブル依存って、パチンコ玉を飲んでいなくてもないのに、何で止められなくなっちゃうのと思うじゃないですか。で、でも、脳の中で起きていることっていうのは、こちらの物質依存と行動依存、ほとんど同じようなことが起きているらしいんですね。で、今ちなみに、ちょっと申し上げますと、元々が行動依存、キング・オブ・行動依存といえ、ギャンブル依存症だったんですけども、日本の中ではね。でも、今は、ネット、ゲーム、スマホのほうが、ちょっともう上をいっているということで、追いついているというか、追い

越されたというか。それが良いんだか悪いんだかみたいな状況ですけど。推定人数はこんな感じになっています。ギャンブル依存症の推定人数は320万人と去年発表されてですね、ま、こなれた数字が出てきたので、まあ私たちもこの位かなというふうに思っています。ネット依存のほうは421万人でもう超えているのですよね。で、ちなみに今このネット依存で問題になっているのが中高生。つまり、行動依存はどんどん低年齢化してるんですよ。早い子は小学校で罹患していて、この行動依存、ネット、ゲーム依存というのが、このギャンブル依存とか、行動依存のゲートウェイになっているということで、すごく問題化しているの、予防教育を導入しようみたいな動きが文科省のほうでも始まっているのです。その委託事業を我々が受けているんですね。ちなみに、この中高生の51万人というのは、じゃ、全国の中学、高校、全部のクラス数で割ったら、クラスに一体だいたい何人くらいいると思いますか。もう時間がないので申し上げますけど、だいたいこれを全国のクラスでやると、クラスで3人位いる計算になるんですよ。そのくらいもう深刻な問題になっていて、日本は行動依存が実は多いということなんですね。で、もう一回ギャンブル依存のほうに戻しますけれども、依存症って何なのって言ったら、物質とかプロセスですね。行動ですね。関係性に頼りすぎて問題が起きているにも関わらず、自分の力では止められなくなっちゃう病気なんだっていうところなんです。

今日ですね、何か一つ覚えて帰る、あのおばちゃんすごい早口でいろんなこと言ってたけど、なんかいっぱいいろんなこと言ってたけど、じゃ、一番重要なことは何だったのかなと思ったら、この病気だということを、覚えて帰っていただきたいんですね。で、じゃ、それはどんな病気なのかというところを、ちょっとご説明します。

ごめんなさい。一つ戻りますね。じゃ、この病気っていうのは、どういう病気かという、脳に化学変化が起きていることが分かっている、神経伝達物質であるドーパミンが深く関わっているんですね。じゃ、ドーパミンって何なのって言ったら、ドーパミンというのは、報酬系と呼ばれてですね、快楽を感じる、脳の快楽を感じる物質なんです。で、皆さんですね、何か一つのことをやり遂げたとか、達成したとか、目標を達成したとかでもって、やったという快感があるじゃないですか。あと、何か好奇心を持ってワクワクしている時、そういうときもなんかこう、自分の中で、ハッピーな感じがしますよね。そういう感覚を与えてくれるホルモン、それが、ドーパミンなんです。だから、人間はこのドーパミンと上手く付き合っている訳ですよ。ま、脳内麻薬なんていうふうにも言われますけれども。で、例えば、勉強頑張った暁に成績が上がった。スポーツ頑張った暁に良い記録が出た。そうや

った時にやはりドーパミンが出る訳ですよ。で、それと上手に人間というのは付き合っ、努力みたいな事をやって行ける訳ですね。で、じゃあ、このドーパミンがどうなって行くかという、依存症の人って言うのはこんな感じになっているらしいんです。これ、私達の理事をやっている、佐藤拓先生からスライドをお借りして来て、依存症ってこういう事だよっていうふうに説明を聞いたんですけど。人間こんな風に、ドーパミンというのを皆さんの頭の中にもあって、こんなふうに上手に付き合っている訳ですよ。ところが、その、何か目標を達成したりとか、その努力しなくても、アルコール、薬物、ギャンブル、ゲームみたいな、インスタントな刺激を受けると、ドバドバとこんなふうに簡単にドーパミンが出ちゃう訳ですよ。で、これを繰り返して行くうちに、発症してしちゃう人がいるですね。病気になっちゃう人がいる、依存症になっちゃう人達がいる訳ですよ。で、依存症になっちゃうと何が怖いかというと、これを繰り返していて依存症になっちゃうと、今度、普段の時にこのドーパミンが出てこなくなっちゃうらしいんですよ。人間の身体って恐ろしいですね。もう簡単にこれでインスタントな物に出るようになると、これを作る努力を止めちゃうらしいんですよ。となると、どうなるかっていうと、これって、快感を与えてくれる様な物質なので、もう普段やって無い時に、イライラ、ソワソワして居られなくなっちゃうんですよ、という病気なんです。この強迫観念というのが、普通の人達には分かって貰えない感覚なんです。だから、このギャンブル依存と言うのは、誰がなるかは全く解らないんです。例えて言えば、アレルギーみたいなものというふうに理解して貰えれば良いんですね。例えば、アレルギー、大豆のアレルギーとか、お蕎麦のアレルギーとかありますよね。それって、みんながみんな発症する訳じゃ無いじゃないですか。でも、一部の人が発症する訳ですよ。ギャンブルも全く同じで、みんな同じ様にギャンブルをやるのだけれども、その中の一部の人が、この依存症を発症するんだって考えて下さい。で、それは別に、その人の性格が問題な訳ではないんですよ。だって、大豆アレルギーになる人は、大豆を嫌ってアレルギーになるなんて、「なんて意思が弱い奴なんだ」みたいな事を思わないですよ、皆さん。「お蕎麦のアレルギーが出るなんて、どれだけ怠け者なんだよ」みたいな事思わないですよ。ところが、依存症に関しては、そこで、アレルギー反応のような、依存症、ギャンブルを自分の力で止められなくなる、この調節が効かなくなる病気になった人に対しては、「なんて意思が弱い奴」、「駄目な奴なんだ」というふうな、ラベリングをされてしまうのが、今の社会なんですよ。で、これを自分の意志の力でギャンブル依存症を治していくなんていうことは出来ないです。だって皆さん、ちょっと考えてみて下さい。ドーパミンが過

剩に反応しちゃう、ドバドバ出ちゃう訳ですよ、ギャンブルをやった時に。で、それをやらないと、それが出なくなるという事は、例えば、同じ様な病気として、高血圧の人達って居るじゃないですか。じゃあ、高血圧になった人達が、こんなふうに説教されて治るのでしょうか。「お前なあ、もう女房子供も居て、いい年だろう。一家の大黒柱じゃないか。何、血圧なんか上げているんだ。家族の事考えたら血圧を上げている場合か」みたいな事を言って、血圧を下げられる人なんかいないですよ。でも、依存症者はそれをずっと言われているのですよ。「家族の事を考えろ」、「親がいつまでも生きていないぞ」みたいな事を言われて、「このギャンブルを止めるんだ」という事をずっと言われてるんです。でも、出来ないんですよ。自分だって、不可解だし、それをやらなくちゃという事は重々解っている。でも、出来ないというところでずっとジレンマに陥っているのが、ギャンブル依存症者なんです。じゃ、ギャンブル依存症ってどういうふうになっているかというところ、こんなふうに感じてます。初めはギャンブルをやると、ちょっと楽になるんですよ。スッキリ楽になって、わあ楽しかった。これ皆さん同じですよ。ギャンブルやる人も、まあ、やらない人も想像出来ると思うんです。でも止めたら普通に返ることが出来るんです。で、こうして普通に返って行く、皆もし当たったとしてもラッキーだったけれど、ギャンブルで家が建つ人はいないよねって、たまたまだよねって、ラッキーだったって、終わるじゃないですか、もちろん、私もそう思っていました。やり始めた時、うちの夫だってそうです、ずっとギャンブルで家が建つ奴はいないって、分かっているし、ギャンブルでお金が儲かるなんていう事は、思ってもいません。そんな馬鹿じゃないです。いくら、何だって。で、それは、分かっているのだけれど、依存症、発症しちゃうと普段の時にドーパミンが出ないからイライラ、イライラしていられなくなるのですよ、この強迫観念が病気の症状で、なおかつ、それをやるとちょっとだけ楽になるのです。で、やらないと、もうまた、イライラしだして、今度は、もう普通にも戻れなくなるこの症状が依存症なのです。で、その楽になるって言っても最初の頃は、やらないとイライラするからやると普通になる。普通になるために使うのだからというふうに依存症者が言い出すのですね、ところが、それもやり続けて来ると、どんどん耐性が出来てくるので、やっても普通にもなれないのです、普通にもなれないけど、もうこのイライラが止まらないから、ちょっとやるその間だけ少し楽になるぐらいの感じなのです、だから、本当に依存症の末期の頃、あたたしたちも末期の時には、もうこれでまたやったら借金が増えるし、やったら地獄だっている事、わかっていました。わかっているのだけれど、そのイライラ感に抗えないから、ちょっとだけやろうって思うのです。五千円だけ

ならいいじゃないかっていうふうに落としどころを自分の中で、無理くり作ると、少しホッとするのは、そのイライラ感が少し収まる、だから、五千円だけやろうと思って行く、でも行ったら今度渴望現象で止まらないのですよね、だからこの強迫観念と渴望現象って言うのが、この依存症の病気なのです。でもその事が、まず私自身がわからなかったのですね。で、今このギャンブル依存症っていうのは、こういう感情と深く関わっていて、要するに、ギャンブルってじゃあ何のためにあるのって言ったら、多くの人たちのストレス解消になる訳じゃないですか、楽しいし、刺激的だし、遊びとしてエンターテインメントっていうか、何か、ちょっと面白い所がある訳ですよ。だから、多くの人たちが、ギャンブルを好きになる。で、ほとんど9割の人たちは、そのストレス解消として、上手に機能しているのですよ、ギャンブルというのは。で、上手に機能しているのだけれど、その内の一部の人たちが発症するのだからって言うところなのです。で、このストレス、こういう悪感情を持った時に、インスタントな物として、悪感情を忘れる手段として、忘れる事が出来るという事でこのインスタントな物に利用しだすと依存症になりやすいという事が言われているのですね。つまり、この感情を上手に昇華させる事を知らない人たちがの方が、依存症になりやすいっていうふうには言われています。じゃあ、この感情を上手に昇華する事が出来ない人達というのは、ではどういう人達なのって言ったら、元々虐待をされているとかですね、家族の中で虐待があったりとか、物凄、厳しいお父さんとかに育てられて自分たちのこのリベラルな話し合いが出来ない様な家庭だったとかですね、後は、学校でもいじめに遭ったとか、何らかのトラウマがあるとか、そういう人達が割と依存症になりやすいという事は言われています。で、だからあれですよ、大王製紙の井川さんなんか、正にそういう感じですよ、お父さん物凄、鉄拳制裁で、ボッコボコに小さい頃からされて、階段から突き落とされたりしたという事が書いてありましたよね。『熔ける』の中で。で、あれを読んだ時に、「ああやっぱりな」というふうに思いました。つまり、自分の感情というのを上手に昇華させる方法がなくて、いつもそういう事がトラウマになっている訳ですよ。そしていつも人の気配、人が何を考えているかという事が気になって気になってしょうがないっていう生きづらさがあるって、そういった物をギャンブルで一瞬で忘れる事が出来たっていう、その成功体験が大きいですね。よくですね、専門家の人達、余り良く分かっていない様な人が、ビギナーズラックが忘れられなくてとかって言うのですけど、だから依存症になっちゃうって言うのですけれど、そんな事もないよなっていうふうに私は思っています。私はだってビギナーズラック全然無かったですし、でも、やっぱり、競艇場に、私、嵌



っていたの競艇なのですけど、競艇場に行った時に物凄いホッとしたのですよね、この居場所感があつたっていうか、そこだと誰にも責められないみたいな、安心感みたいな、またそこに嵌っていったのじゃないかなって自分では思っているのです、まあ、そういう事です。で、あの皆さんに是非お伝えしたいのは、だからこの、こういったこの病気の訳だから、まあアレルギーを持った人たちがいた時に、じゃあ大豆アレルギーがあるから、世の中全部、大豆を撤去しようみたいな話にはならないですよ。大豆アレルギーを持った人たちがいるよねって、だからじゃあ、お菓子のメーカーの人たちは、アレルギーについて表記しましょうとか、その、何て言うのですか、ルートを使ってやりましたよとか、今、どんどん表記が細かくなっていきますよね。そういうことに協力しましょうということに、だんだん世の中がなっているわけですよ。私たち依存症者が求めているギャンブル依存症対策は、つまりはそういうことです。みなさんがギャンブルをやって楽しんでおられるっていうことに対して、良いも悪いもないです。だから私たちはカジノに対して賛成も反対もしてない、多くの人達が楽しみたいっていうことにその気持ちはわかります。だって9割の人たちがそれはできるのだから。だけどそのうち一部の私たちが反応する人がいるから、そこに対して社会が協力してくださいということが、そんなにおかしなことでしょうかというふうに思っているんです。ただ、ギャンブル依存症者の側、当事者家族の人たちは割とこういう考えの人が多いと思うのです。私のような考えの人が多いと思うのですけどこれがいきなり政策論争に使われちゃったんですよ。反自民みたいな感じになっていたり、その何て言うのかな、そういうところに使われていったから、何かギャンブル依存症がなんかねじまげられていったんじゃないかなというふうに思っていて、ギャンブル場反対、パチンコ屋潰せみたいなことは、私達は言ったことがないです。少なくとも私達とか、私達の団体は。で、ギャンブル依存症関係で一番大きい団体がギャンブル依存症問題を考える会ですから、次は、今できているNPOの全国ギャンブル依存症家族の会というのがあるんですけど、そこが次に大きいところかなと思いますけど、自助グループというところは政治に主張とかしないので、こういう意見を言う民間団体はそういうふうに思っているんです。ところが、今ちょっと変な感じになっちゃっていて、でも私たちの考え、依存症者の考えは、禁止とか排除で依存症を予防できるものではないっていうふうに、それは分かっているんです。何故なら、アメリカ禁酒法、失敗しましたよね。アメリカのアルコール依存症の人達がすごく増えて禁酒法ができた。でもそしたら、闇のお酒が蔓延って、マフィアが蔓延した。で、失敗してあつという間にまたそれは元に戻ったというふうに

になりましたよね。で、私たちギャンブル依存症、もしこの世の中から全部ギャンブルを撤廃しようということになって、日本が全部ギャンブルを禁止したとして、それでもギャンブル依存症者は絶対残ります。それは自信がある。何故なら、ギャンブル依存症になる人達というのはやっぱり何でもギャンブルに変えてしまうからです。今ですね、私たちギャンブル依存症を考える時に相談がたくさんきますけれど最近のトレンド、依存症はトレンドがあるんですよ。ちょっと前、薬物依存のトレンドというのは危険ドラッグだったんですよ。じゃあ、ギャンブル依存の今のトレンド、昔は無かったのにすごく増えたよねっていうのは何だかわかりますか。答え言っちゃうとそれはFXです。FXはギャンブルではありません。でも、それで依存症を発症する人達がいるんです。ギャンブルと似たような仕組みだから。株式投資とかそういったものの全部の経済行為やなんか全部無くすのといったら、もう日本は原始の時代に戻らなきゃいけない。でも、原始の時代に戻ったとしてもやりますよね、依存症者は、ということなんです。で、こういう不健康な感情の処理の仕方には、こういったものがあるということで、脳の画像診断なんかをしていただくと一発で分かるようになっていて、健康な人というのは様々なものに興味を持てるから、様々なことでストレス解消ができるわけです。ところが、ギャンブル依存症者というのは、いろいろなもので、もう全く脳が反応しなくなってるんですね。で、ギャンブルだけにその代わり、激しく反応してしまうというところがあって、それでこのギャンブル以外のものに興味を持てなくなる脳に変化してしまうんです。でもこれね、戻ることができるんですよ。これちょっとみるとアルツハイマーの人の脳みたいな画像みたいだなと思われる方いらっしゃると思うんですね。でも、これ、依存症はここから回復することができるんだっていうことが、大きなポイントなんです。だから、一度なったらもう危険なものっていう事じゃなくて、なる人はいるよね、何やったって絶対なる人はいるんだ、だから回復させてあげる社会にならないとねっていうのが、私たちが求めている依存症対策です。で、一つ申し上げたいことがあるんですけども、そこで、恐ろしいものみたいなふうに言われちゃうと、やっぱり、なかなかみんなが相談できない社会になってしまうんじゃないかなというふうに思っています。で、わかってきたこと、一つね、これ申し上げたいですけど、私達も本当の病気なのか信じられなかったんですけど、「え、そんな自分の力でやめられるじゃないの」って思っていました。何故なら短期間ならやめたことがあるから、やめ続けることができないのであって、それ1日、2日やめたことがあるわけですよ。だから、やっぱり意志の力なんじゃないかと思ってたんです。でも、「ああ、やっぱり病気なんだ」と思うことが数年前にあったんですね。

それはこの逆をいった病気があるんです。つまり、ドーパミンが減ってっちゃう病気、それがパーキンソン病なんですよ。パーキンソン病の治療薬というのは、つまりそれを増やすわけですよ。そしたら何が起きたと思います。副作用です。副作用でギャンブル依存症発症する人達が出たんです。それで、その症例が世界中で報告されてオーストラリアなんか200人からの集団訴訟になったんです。それでファイザーなんかは、自分達の薬でギャンブル依存になった人が、自分達の責任で治療費持ちますよみたいな事が起きたんです。それが起きた時に「ああ、やっぱりそういう病気なんだな」というふうに私達も思いました。それとですね、もう一つ、今の所、見てください。パーキンソン病とか同じようにドーパミンって快樂をもたらしてる病気だから、うつ病とか統合失調症治療薬として、このメカニックが使われてるんですね。で、その病気の副作用の所にやはりギャンブル障害っていうふうに書かれてあるんですよ。それで発症しちゃう人達がいる。脳の病気なんだということを是非皆様にご理解いただけたらなというふうに思っています。病気というんですね、みんなね、「スーダラ節みたいな病気」、「わかっちゃいるけど、やめられない」みたいなので、よく「お前、病気だよ」ということを言うじゃないですか、あっちの病気だってみんな思ってるんですよ。でも、ああいう比喩的に使う病気ではないんだって、糖尿病、心臓病、腎臓病、依存症みたいな、そういう病気のカテゴリーなんだなというふうに思っただけだとありがたいなと思います。で、じゃあ何をやったら良いのっていうことです、何をやったら良いかっていったら、たった1個だけしかギャンブル依存症の対策の支援を叶えてくれないとしたら、私は絶対に家族支援を入れます。これが1番重要な対策だと思っています。この辺ですね、もう時間がないので見て頂ければというふうに思うんですけども、家族に対するアンケート調査をしたんです。そうすると借金の尻拭いなんかをみなさんしているんですね。この借金の尻拭いをしないっていうことが、すごく大事なんです。で、依存症っていうのは、一人じゃ依存症にはなれません。手助けする人がいるから依存症になっちゃうんです。進行していつっちゃうんです。で、家族とかが、借金が出た、大変だ、お金を返してあげないと自殺しちゃうかもしれない、悪いことするかもしれない、犯罪に手を染めるかもしれない、借金の金利だけで私達は立ち行かなくなるかもしれない、だから今度だけこれを最後にもうやめてよって言って、借金の尻拭いをしちゃうんですよ。そうすると何を起きるか、また借金できる体になっちゃうんです。これはアンコール依存症の人が病院につながるのと一緒です。内科医に、アルコール依存っていうのは、じゃあ何をやるのかというと、（内科医への）意識、教育というものをすごい力をいれているんです。何でもかと言うと、内

科に来ますよね、膵炎とか肝がんとかそういうのになりますよね。みんな、依存症の人達は。アルコール依存の人達。そうすると病院に入院しますよね。膵炎か何かで。また飲める体にして娯楽に出しちゃうんですよ。内科の人達は。ちゃんとここで連携して、精神科と連携してリエゾンがとられて依存症治療ということに、次にいかないと何度も同じこと繰り返すんです。でも、ギャンブルはそれを家族がやっちゃうんです。借金を尻拭いして、また借りられる、借金を尻拭いって、また借りられる。それをやっていくうちに、どんどん病気が進行していっちゃうんです。だから家族への正しい知識、どうやって手放していくのかっていうことの、そのレクチャーみたいなものが必要なんです。強いて言えば、じゃあどうやったらいいのって言ったら、依存症対策はこの一般の人達、今来られてる人達って、普段私達セミナーやっているのと全く違うわけですよ。普段私は、精神保健センターさん何かで呼ばれるわけですよ。それで、援助職のセミナーやってくれとか、市民向けに困っている家族に向けてこういうセミナーをやってくれてふうに言われるんですよ。でも、今来られているのは経済会の方とか、観光の方とかが来られているじゃないですか。私にとってはビックチャンスです。全く興味のない一般市民の人達の知識を底上げできるんだから。これで、もしですよ、周りにいる人達にそういう問題があった時に「あ、それ病気だよ」って、それ病気だからきちんとそういう手助けできるところに繋がったほうがいいよっていうことをみんなに知ってもらう、これが最高の依存症対策になるわけですね。だから、こういう底上げが必要なんです。で、日本でギャンブルが一番多いと言ったら、大体もうパチンコ、パチスロですよ、もうこれは考えて見ればわかりますよね、手軽だから、身近だから、沢山あるからです。で、大体今、パチンコ、パチスロ、だんだん潰れてきてますけど、1万1千件ぐらいあるんですね、1万1千件ぐらいあるというと大体、ローソンと同じぐらいの数です、ローソンと同じぐらい手軽にあるんですよ、パチンコ、パチスロが。だから、今、パチンコ、パチスロっていうのが最も多い依存症の問題になってるんですよ、で、この辺、家族が見た、他の関連の問題ということでですね、みんなやっぱり家族が不安になっちゃった、することに対して、すごく辛いなっていうふうに家族の人達は思っているんですね。この辺はちょっと時間がないので、飛ばします。資料だけ見てください。じゃあ、ギャンブル依存症対策、具体的に何をやったら良いのって言ったらですね、一つには、先程、小林さんの方から出てましたけれども、入場の時点で、色々なことをきちんと機能させるっていうことが大事なんですよ、今のギャンブルって、パチンコだって競輪だって、競馬だって、別に年齢制限を誰もやってないんですよ。この中でも、密かに俺は中学からやっていたっていう人

いますよね、高校からやってたパチンコなんてみたいなの、雀荘行ってたとか、  
いう人なんていますよね、そういう今の日本のギャンブルっていうのは、世  
界でも稀にみるギャンブルにゆるゆるな国なんです。シンガポールなん  
かは、宝くじ売り場に子供連れて並ぶことすらできません。そのぐらい厳し  
く、厳格にやってるものが、今、全くその対策を取ってないので、ギャン  
ブル依存症になった人達にアンケートを取ると、やっぱり始めた年齢が物凄  
い若いんです。で、この始めた年齢が若いと依存症を発症するリスクは高い  
っていうデータがどんな研究、どこの、世界中どこの研究でも出てます。そ  
りゃそうですね、脳がまだ成長過程にある段階から、この刺激に慣れちゃ  
うわけですから、発症するリスクは高いですね。特に依存症になる人は前  
頭葉がやられるっていうんですけど、前頭葉って成長が一番最後なんです  
って、25歳ぐらいまで成長するらしいんですね、そこがやられちゃうん  
ですよね、依存症になる人達って。なので、やっぱりそのリスクを軽減するた  
めに、入場規制をなんかをしなくちゃいけない、でもですね、こういう早い  
時点でギャンブル場に行ったことのある人達っていうのは、どうやって行  
くかっていうと大抵の場合、家族に連れられて行ってるんです。で、去年、  
一昨年か。一昨年、千葉県が初めて、依存症のモデル授業をやったんですけ  
ども、その時、現役高校生に対するアンケート調査っていうのを初めて入れ  
たんですね、現役高校生に対して。その時、私が委員をやっていて、教育関  
係者を説得してアンケートをやらせたんです。その時5000人の現役高  
校生にアンケートを取ったところ、106人の子供たちが既にギャンブル  
をやったことがあるって答えてるんです。誰と行ったかっていうところを  
記述式で書いてもらおうと、ほとんどが親なんです。私の場合、おじいちゃ  
んがギャンブル依存症でした。もう幼稚園の時から、おじいちゃんに連れら  
れてパチンコ屋に入り浸ってるわけですよ。しょっちゅう行ってた。お年玉  
なんか貰うと、いとこ達とみんなパチンコ屋行くのは、うちの我が家のお  
正月の風物詩でした。大人達に麻雀を覚えてもらいました。そういう家庭だ  
ったんです。なんでって言ったら、みんなギャンブル好きだからです。でも、  
おじいちゃんのようににはならないって、みんな思っています。節度をもって  
ギャンブル出来るって、でもギャンブルは楽しいよねっていう家庭だった  
んです。だから、私は初めて補導されたのは小学校2年生の時ですよ。小学  
校2年生の時に、お年玉残ってたんだけど減っちゃったから1発これで、パ  
チンコで儲けようと思ってですね、一人でパチンコ屋に行ったんですね、そ  
したら、補導されちゃって、「あっ、パチンコ屋っていうのは一人で行っ  
ちゃいけないんだな」っていうのをその時初めて分かったぐらい親しかった  
んですよ。尚且つですね、私、高校生の時4回停学になっています。それは、

雀荘です。雀荘に行って、先生の手入れ来るからって行って、隣の駅にわざわざ行ったんですけど、手入れ喰らってですね、まんまと停学になるみたいなことがあったんですけども、そういうすごい若い年齢からやっていると、やっぱりリスクは高いんですよ。で、ご家族、圧倒的に多いわけですよ、やる人が。で、ちょっと申し上げると、あと、遺伝子も見つかってるんですよ。遺伝的要素が強いんですよ、ギャンブル依存って。遺伝と環境要因というふうに言われていて、環境要因があってですね。環境って家庭だけじゃないですか。お友達にギャンブル好きがいるかもしれないし、そこはわからないですけども、遺伝がもちろんえんどう豆みたいには遺伝しないんですよ、2割ぐらいは遺伝するっていうふうに言われてるんですよ。だから、私は完璧に遺伝だなと思っているんですよ。母方のおじいちゃんと自分の父親がそうなので、遺伝だなっていうふうに思ってるんで、私のせいじゃないと思っているんですけど。

そして、医療とか行政に望むものということで、ギャンブル依存症というのは言ったら、連携なんですよ、連携。連携プレーでしか回復出来ない。で、医療で、医者に行って診断されて「依存症ですよ」って言われたって治るものじゃないんです。で、だから医療に望むものことっていうのはこの後説明しますけれど、自助グループへの橋渡しをしてほしいということと、併存障害の治療。で、要するにストレスと凄く関わっているわけですよ、依存症っていうのは。で、併存障害がある、つまり発達障害とか鬱病とか統合失調症とか双極性障害とか、ベースになる精神疾患を持っている人というのは、社会で生きていくことって辛いわけじゃないですか。いろいろなダメージが大きいわけですよ。いろいろ壁にぶつかることが大きい人というのは、どうしても依存症になりやすいですよ。だって一瞬にして嫌なことを忘れられるから。そこでくっつきやすいんです。なので、この併存障害の治療ということはやってほしいということと、自殺対策ですもう一つは。この自殺対策ですね、いろいろ書いてきたけど一個だけ紹介します。一昨年、東京で起きた案件です。これは私が介入に行きました。本人はですね、こんなでっかい牛刀包丁を持ってですね、毎日、毎日金出せという風に家族を脅して、家族はびびって、出るに出来ない。出たら他の人を傷つけるんじゃないかと思ってるから。だけど、この生活は地獄だと思ってるし、警察にも何度も相談した、精神保健センターにも相談した、保健所にも行った、病院にも行った、でも誰も何ともしてくれない。つまりですね、医療機関、医療機関というふうに依存症対策持っていくんですけど、医療機関というのは自分の足で依存症かもしれないから見てくださって行く人なんですよ。軽いでしょどう考えたって。もう依存症になってるかどうかもわからない

ぐらいの感じですよ。もしくは家族に説得されて嫌々ながらも来たって  
いう人たちは、家族関係もまだ上手くいっているわけじゃないですか。それ  
よりもさらに進行している人達、もうどうにもならない、みんなに匙を投げ  
られているような人達は、もうこんな状況になって困っているから助けて  
くださいって自分の足で行ったりしません。これが一番困っている案件な  
わけですよ。その人たちに対して私たちが介入しているんです。で、そこに  
行った。でも家族の人が「じゃあ、いいよ、私が相談に行つてあげる」って  
言って、面会に行くことにしたんですけど、家族がびびっちゃって、あんま  
り気楽に行くって言っちゃったもんだから、いやいや、私リコさんって呼ば  
れていて、「リコさん一人で来たらさすがに危ないから、警察を連れて行っ  
た方が良いでしょう」って言われて「ああ、そうか」と思っていますね。「警察に  
一緒に来てくれ」って言ったんですよ。でも、警察はそういう予防的なこと  
では動いてくれません。警察を説得するのに3時間かかりました。で、制服  
の交番警官は全然駄目だったんです。何度も何度も呼び出されていて、全然  
うまくいってないから。「もう、あいつに何言っても駄目だよ」みたいにな  
っちゃったんです。で、これは話にならないと思って、所轄に行つたんです  
ね。所轄に行つたら女の刑事さんが同情してくれたんです。「それは、大変  
ね」って。「わかったわ、行つてあげる。でもね、危ないから俊敏な若い刑  
事を連れて行くわ」って言って、俊敏な若い刑事をお供に引き連れてですね、  
制服3人ぐらい連れてですね、5人で行つたんです。で、私が行つて、最初  
は大暴れですよ。「何しに来た、テメェ、こらあ、人の家や」みたいなこん  
な感じになってたんですけど、「まあまあ、落ち着いてと、あのお婆さんの  
話を聞いてあげなよ」みたいな感じで、一生懸命お巡りさん達が説得してく  
れて、やっと話を聞いてくれて、一時間ぐらい経つて落ち着いて。「君だっ  
てさ、こんなことずっとやってたくないよね」みたいな、まあ介入のテクニ  
ックがあるんですけど、それは私がアメリカで研修してきたんで、テクニッ  
ク…、細かいことは省きますけどやって、本人もじゃあ病院に行こうとい  
うことになったんですよ。で、病院に行く、でも、最後に一杯飲ませてくれ  
て言ったんですよ。まあ、しょうがないなと思って、そういう時は飲ませる  
んですよ、私たち。で、飲んで、コップを置いた瞬間、ここに手を入れて、  
ナイフをバツと出してグサーって首に刺したんですよ、自分の。だけど、俊  
敏な刑事がいて、私はわからなかったけど、お巡りさんはバーンって、こう  
やってくれて、ちょっとした掠り傷で済んだんですよ。ところがですね、そ  
れで病院に運ばれて、手当てしたんですよ。その後です。リエゾンしてくれ  
ないんですよ、どこも。精神科病院も、こういうリスクの高い面倒臭い人の  
ことを引き受けてくれないんですよ。それで、もう東京中の精神科の医療が

全部満床になるという怪奇現象が起きたんですね。それで、いくら電話してもどこも受け入れてくれない。私たちはもう必死になって、お巡りさんに「これ今日、帰すってなったら、本当に困ると、地獄だよ、殺されるかもしれない。これを家に帰すことだけは勘弁してくれ」っていうことで言ったら、刑事さんが同情してくれて「じゃあ一晩だけ預かってあげると。でも一晩だけよ、明日あんたたち何とかすんのかなよ」って言われて、どこに預かってもらえたのか、ちょっと深く考えるのはやめようみたいな感じで、預かってもらって、次の日、東京都を巻き込んで、冗談じゃない、これ何とかしろみたいな感じで、うわあって、もう、会で総力戦ですよ。電話して説得して知り合いの精神科の先生たちみんな、アルコールの諸先輩方に協力してもらって、「どこなら受けてくれそうか」みたいな、「知り合いの先生いないですか」みたいな感じで、「ギャンブルなんですけど」みたいなことやって夕方やっとたった一軒受け入れてくれたんですよ、っていうことをやっているんです。これを私達はボランティアでやっているんですよ。完全、無理です。もう、こんな事例って山のようにあるんですよ。今もこれ電話でやってるんですけど、大阪で全く同じような、首吊ってるシーンを、親に動画で写して、今から死ぬからってやった子を、こんな感じでやっと病院に入院させたケースっていうのを、今バタバタやっていたんですけども、そういう事を完全ボランティアで民間でやる羽目になっているんですよ、今。何故なら、ギャンブル依存症っていうのがフィーチャーされたじゃないですか。相談がものすごい増えたけど、体制が整ってないんですよ。それで今苦労している。で、こういう医療の事例って事でいろいろあるけれども、医療だけじゃ治らないから、社会で解決するための依存症の対策というのを考えて欲しいと思ってるんです。つまり、こういうことは医療モデルじゃないんです、依存症の回復というのは。車椅子に乗っている人が「クララ、立てるじゃない」、これが医療モデルです。つまり、車椅子に乗っていることがだめだと、立てるようになって、歩けるようになりなさい。これが医療モデルなんですよ。でも、社会モデルというのは、車椅子にいたまんま、同じように、社会生活が送れるように、つまり、病気は皮膚の外にあるというふうに考えるわけですよ。そして、社会を変えようよと。スロープを付けようよ。車椅子の人達でも乗れるようなエレベーター付けようよっていうような事をやっていく。それが社会モデルですよ。依存症は社会モデルで解決して欲しいんです。もし皆さんがIRを誘致するなら、そういう事を是非依存症対策で考えて欲しいという事なんです。で、行政の人達も、是非ですね連携して欲しいと思ってるんですけど、今一番問題は、生活保護なんですよ。生活保護とギャンブルバッシングというのがものすごい強くなっていて、それで、ギャン



ブル依存症者には生活保護を出さないみたいな雰囲気になっているんですね。それは困ると。なぜなら、ギャンブルのために仕事が出来なくなっているんだから、回復させれば、また生活保護を切って、税金を納める側に回れるんですよ。で、その間、治療にかかったり、回復施設に入寮したりする間だけ面倒見て下さいっていうのが、私達の主張なんですよ。ところが、バッシングが厳しいものだから、生活保護のワーカーさん達は、「ギャンブルやってないですね。あなた、ギャンブルはやってませんよね」みたいな、誓約書みたいな物を書かせてすごい厳しく言うんですよ。だから、ギャンブル依存症者は、正直な事が言えなくなってるんですよ。で、三日で使っちゃって、私達の所に泣いて電話をかけてくる。こちらのアドバイスとしては「もう、依存症だって言って治療につなげてもらいな」、「自助グループに行く交通費を出してもらいな」と言うんだけど、それを言ったら絶対生活保護を切られるから、怖くて言えないって言うんですよ。じゃあ一緒に行ってあげるよっていうことで、私達はその自治体まで一緒に行って、足を運んで説得に行くんですよ。それも全部自腹ですよ、私達が。で、それを言って説得に行くんだけど、やっぱり生活保護の担当者が、怒り出して「何で正直に言わなかったんだよ、反省文書け」って私も一緒に反省文書かされたりするんですよ。意味がわからないじゃないですか、それ。そんなことをして、何の意味があるのって。皆様の無知が問題ですよっていう感じなんですけど、そういう事が起こって、私がてんてこ舞いしているんです。

なので、もう一つですね司法との関係、これも連携が必要で、一応、一つ例を挙げると、調布市のおじいちゃまが、去年ですね、孫にお金をせびられて、年金が入ると孫にせびられて、ついに断ったら刺されちゃったっていう、殺されちゃったという事件があったんです。これもですね、もしですね、このおじいちゃま、年金暮らしのおじいちゃまが、誰かに相談する。地域の民生委員の方とか、地活の方とか。社協の方とか。そういった方に相談して行って、その方達がいる、「ああ、それはギャンブル依存症だよ」って知識があれば、そして、もし私達の所に、こんな案件があるんだけどって相談してくれてたら、この事件は起きなかったですよ。なぜなら、本人に介入したから。その孫に。そして、施設につなげるとか、そういった手立てがあるんですよ。そういう事をやっていくっていう連携が何より大切なんです。依存症対策というのはですね。この辺は資料など見ていただくという感じで。もう時間が無いので。依存症の誤解っていうのは、これ私のツイッターでも1万9千くらいリツイートされたんですけど、もう二度とやらない、心も入れ替え仕事に専念するみたいな方へ持って行きたがるんですね、一般の人は。相談を受けると。しっかりやれよみたいな。で、そうするとやっとなんて

くれたかとなって、でも私達はそんな甘くないって思うんです。そうじゃなくって、自分では止められない、止める自信がないんだってなったら、ついに認めてくれたっていうふうに思うんです。そう、一人じゃやめられないから、それが依存症という病気なんです。じゃあ、何をやったらいいの。何と言っても、この自助グループの役割が大きいんです。自助グループっていうのは、同じ経験をした人達が集まっている相互扶助の団体です。で、ギャンブルはGAというものがあります。ギャンブル依存症の家族にはギャマノンという団体があります。で、来週聞いたところによると、大きなイベントが北海道であるみたいなので、もしですね興味がある方、ぜひ行っていただきたい、ちょっとネットで調べると、たぶん出て来るんだと思うんで、行っていただきたいいなと思うんですけど。こういう自助グループと呼ばれるものがあるんですよ。で、ここに繋いでもらう、でも本人は行きはしきません。あんた、ギャンブル依存症だから行きなさいなんて言っても行きはしきません。でも、相談を受けたみなさんが、ご家族から相談受けたら「それって病気らしいよ。どうやったら良いか家族の人達はみんなノウハウを持っているんだって。本人を回復させるノウハウを持った人達が集まっているグループだって、それがギャマノンっていうらしいよ。そこへ行っていろいろ学んでみたら。」こんなふうにはアドバイスしてほしいんですよ。で、自助グループってどういうことなのって言ったら、同じ経験をした人達がそこに行くと新しく来る、繋がって来る人達を助けているんです。で、その助けることで自分も回復し続けることができるっていう、つまり与えることで与えられるってグループなんです。それって人間の心理じゃないですか。じゃあ、先程の脳のドーパミンの図を思い出していただけますか、この図がありましたよね、これ、さっき言ったようにもうギャンブルのこと以外で、ドーパミンが出なくなっちゃっている状況な訳ですよ、私達。ところが、自助グループに行くとこの新しく来る人達を助けるということをやると、これをやることでスカスカになっていたドーパミンが、それをやり続けることでありがたいって言われたり、自分の自尊心が上がって来たり、どっかの家族が無事に回復施設に繋がりましたとか、自助グループに繋がりましたとかって言った時に、私達は喜びに満たされるんです。人を助けることで。そして、健康的な方法でまたドーパミンを取り戻すことができる、達成感を味わったり、何て言うんですかね、やり遂げるこの快感、人に感謝される快感、そういうものがまた戻って来るんですよ。でも、最初の頃は全然戻って来ない、来てないから人を助けるなんて言われても、こっちが余裕のないのに冗談じゃないよって思うんですよ、やってた時。私も辛くて4年ぐらい止まんなかったんです。何でかって言うと、その快感物質が出ない訳じゃないですか。

ドーパミンが出ない、世界が全部戦争をしているような状況に見えるんですよ。自分の社会観。例えば、私もその時OLをやったんですけども、何かミスをしたときに「気を付けてね、今度から」って言うだけ。普通の人だったら「あ、私やっちゃった。今度からそのミスやらないようにするにはどうしたらいいかな」って健康的に考えられますよね。でも、依存症まった中の時はそれが無いから、もう社長は私のことを嫌ってて、やめさせようと思っているんだ、みたいに考えちゃうんですよ。で、すごく世の中を生きることが辛くて辛くてしょうがない、ものすごく痛いで私達はそれを「因幡の白兔状態」って言っているんですね。皮膚がないから、ちょっとぶつかっただけで、いたたたたってなっちゃうんですよ。なので、その時めちゃくちゃ辛いです。だけど、その辛い状況に人を助けるんだ、人を助けるんだって言われるんですよ。サービスをやれとかで、半信半疑だけどそれをやり続けて行くうちに回復して行ったんです。だから、そういうことでこのドーパミンの機能を取り戻して行くんだなっていうことが今になってわかったんですよ。で、こういう自助グループの仕組み、しかもこの自助グループっていうのはお金もかからないし、予約もいらぬし、ただ行けばいいんです、そこに。で、ネットで検索していただくと自助グループっていうのは情報が出て来るので、そこにやっている日時、公民館みたいな所で大体やっているの、その日時を調べてそこに行けばいい。そして、行ったら1円以上の献金を取めてくれればいだけなんです。で、これの良いところっていうのは、仲間達がたくさんいるから私もこの仲間達のLINEだけでも二百何十人のグループがあるんですけども、もしですよ、家族の人達、さっきみたいに包丁をつきつけて家族が暴れていますなんて言った時に、それが夜の10時だった時に「どこに連絡するの?」、ってことですよ。どこに助けを求めるの。どうしたらいいのっていうことがわかんないわけですよ。で、もし次の昼間だったとしても、病院に言ったとしてもすぐに何か対応してくれるなんてないですよ。本人連れて来週の予約の時にきてくださいみたいな感じじゃないですか。じゃあ、問題がいつも必ず、平日9時から5時までにギャンブル依存症者が必ず暴れてくれますかってことになりますよね。そうじゃないじゃないですか。でも、自助グループは365日24時間、絶対誰かには繋がるんですよ。どんな夜中でも「誰か起きている」とか言うと、「起きてるよ」みたいなそんな感じ。で、繋がってるんですね。そういうメリットがあるんですよ、私達助け合いでやっているの。しかもお金がかからない、だからこの自助グループっていうことを増やして欲しいし、この自助グループとの行政の連携がなければ、自助グループ自体が潰れちゃうんですよ。行政が抱え込んで行ったら。でも、行政が対応

できることなんてほんの少ししかないんだっていう謙虚さをぜひ持っていただきたいっていうふうに思うんです。自分達の力だけ、医療と行政だけでできることはほんのちょっと、だから民間との協力がすごい大事なんだっていうことを入れて、混ぜて、この対策を考えていただければなっていうふうに思ってます。まあ、回復施設とかあるんですけど、つまり我々がやっている考える会の一番の大きな特徴は何と言っても、本人への介入を行っているってことです。こんなことは行政ではできません。リスクが高すぎるから、こんなこと危なくてできないんです。だから、民間を交えた対策法がほしいっていうふうに思ってるんですね。みなさんにちょっと最後ご説明したいんですけども、ギャンブル依存症対策基本法が先に出ます。これが通らない限りIR実施法は絶対通らない、それは選挙前の各政党のアンケートでもみんなそう言っています。自民党がやらないって言ってます。公明党の熊野せいし先生が与党の事務局長なので、ギャンブル依存症対策の。先生に一昨日電話した時にも、そうおっしゃってました。「絶対にこれを通さない限りIRを通すことないんだ」って。ところが、このギャンブル依存症対策基本法で、今、野党が揉めているんです。「何を揉めるの」と。みんなこれが必要だっていうことがわかっているわけですよ。与党の先生達はサラッとやって、さっさとIRを通したい。で、もちろん維新とかもそうですね。推進派の先生達は早くやってIRを通したい。みなさんの中にもそれを願っている人達も多いと思います。で、野党の人達はこれを通しちゃうと、IRが通っちゃうから通したくないっていう思いがあって喧々諤々になっちゃって、そこにもうこんな感じで右往左往してるのが私達なんです。で、私達っていうのは、やっぱりこの基本法を絶対に通してほしいと思っているんです。で、何で揉めてるのって。何、どこの部分が引っかかって揉めてるのって言ったら、それが一つには関係者会議なんです。推進者派にまわっている維新の先生達も関係者会議を入れなきゃ駄目だっていうことを言っているんです。つまり、医療、行政、保健所、ワーカーそして民間団体の私達、さらには事業主です。競輪とか競馬とか、パチンコとかの事業主も交えた関係者会議でどんな対策ができるかっていうことをきちんと話し合って計画を立てなきゃ駄目だっていうのが、私達の主張な訳です。そして、それに賛同してくれている所もある。ところが、与党がそれをのんでくれないんです。関係者会議を。で、他の党は全部関係者会議っていうふうに言っているんです。で、何でかって言うと、アルコールの法案を作った時に関係者会議ってあったからなんです。アルコールはサントリーさんとか、キリンさんとかですね、そういうのを交えて、我々の側は依存症の民間団体から医療から全部交えて関係者会議をやっとうまくいっているんですよ。だから、そ

れをどうしても踏襲していくので私達はそうしたいんです。ところが、何でかわからない、でも与党の依存症対策のトップっていうのが中谷先生なんです。中谷先生は元防衛大臣ですね。元防衛大臣というイメージが、みなさん強いんですけど、実は依存症会の絶大なる信頼を得ているヒーローなんです。で、中谷元先生と公明党の高木美智代先生、このお二人は依存症界で物凄い信頼が厚い。なぜならアルコールの法案を通してくれた立役者だからなんです。そして、その先生達二人に聞いても「何でこの関係者会議を盛り込めないのかわからない」って言っているんです。どうして官僚の方が、あの官房の方が通してくれないのかわからないって言うことなんで。で、先生達は「これはもう、野党案とのりしろ」って言うんですけど。どっかで折れるわけですよ。野党の、この、あれをやって、これを通すんだよみたいなことやるんですけど。まあそれにするしかないんじゃないの。だから田中さん頑張って、野党の先生達にそれをやりなさいと横串を通してくれる人を作れというふうに言っているんですよ。横串を通してくれる人がまだいないんですよ、全然。で、もし力を貸してくれる人がいたら、そうして欲しいなっていうふうに思っているんですけど。そんなような状況で揉めているんです。

それともう一つは依存症対策の資金です、それを私たちは産業側から出すべきだっていうふうに言っていて、それを今回の法律では間に合わないから、民進案では3年後に財源について見直すっていう文言が入ってる、そこが大きな違いなんです、あとは大して違いません、どこも。で、そのところで揉めて、なおかつこの、これは議員立法で出すので、普通、議員立法っていうのは、与野党全議員の賛成で通すものなのです。ところがこれを与党がしぶれ切らして、強行採決みたいな形になっちゃうと、いかにもIRのアリバイ作りでやっちゃったよみたいな感じな体になって、物凄く良くないと思うんですよ、世論の反発。だって、そもそもIR、世論は反発してるわけですから、それで通すって難しいんじゃないかなっていうところはあって、だからうまくやらないと推進派の先生たちは難しいんじゃないかなっていうふうに思っています。逆に反対派の人達は、これ通すと、IR通っちゃうからっていうのが私たちにとって、最大なネックなんです。もう全然、それじゃギャンブル依存症の人のこと考えてくれてないじゃんって思うんですけど、そのところで、立憲民主党なんかでも、すごく私たちに近い先生たちもいて、共産党も近い先生もいるんですけど。今度の選挙でやってくださいって言った先生たちね。共産党なんか清水忠史先生なんかは、仲良かったんですけど、落ちちゃったんで、なんか共産党の先生方がどうなってくのかなみたいな、ちょっと、わかんないですね。立憲民主

党もそういうふうになっていて、でも、そりゃ困るっていうふうに言ってるんで、これだけは絶対通してほしいっていうことで、長妻先生たちとも、話し合っているんで、多分通すっていうことには、異論はないと思うんですけども、そのような状況なんです。だから、この法案を通さないと駄目っていうことですね。なんで関係者会議で私達が欲しいかっていうと、先程の小林さんの資料を見て頂くとわかるんですけども、このIRに対する対策の、規制の内容のところの24番のスライドの所とかを見ると、カジノ事業から徴収する税金を公益に活用みたいな書き方をするんですよ、官僚が書く。この公益に活用っていうのは、果たしてギャンブル依存症対策に活用するのっていうことになっちゃうんですよ。カジノ管理委員会はこれを書いているけど、カジノ管理委員会はヒアリングに民間団体の当事者の意見を聞いていないですよ、医者からちよろっと聞いただけなんです。カジノの利益の一部を税金として吸い上げるんですけど全部財源なんです。それで公益にあてるというこの書き方っていうのは、やっぱり私たちは不安です。これで依存症対策に回してくれるのが、だって、実際問題、ギャンブル依存、公営ギャンブルってありますよね。公営ギャンブルもこの立て付けじゃないですか。25パーセントのテラ銭を福祉に回すって言って、でもギャンブル依存症対策に一銭も回ってないですよ、今。それで、これだけのバッシングを受けて、慌てて、担当窓口作りしましたとか言ってるのが今の公営の現実ですから。っていうことを考えると、きちんとこの文言が、どうにでも取れるような文言は困ると思っているんです。だから、関係者会議が欲しい。でも、官僚っていうのは、どうにでも取れるような文言で書きたがるんですよ、その辺がバトルになっちゃう所の原因で、アルコールが絶対それはまずよっていうふうに教えてくれるところですよ。だからみなさん、是非ですね賛成、反対の方とかいらっしゃると思うんですけど、民間団体の意見を聞いてやらなきゃ、絶対無理なんだっていうところ、こういうこと理解して、応援してしていただければなど、ギャンブル依存症対策を本当になんとかしたい思われるんだったら応援して頂きたいというふうに思っています。こんなふうに連携が大事なんだっていうことなんです。で、教育とかそういったものを全部含めて、連携を是非考えていただきたいということですね。是非ですね。経済界の方たちも関係あるんですよ。みなさんの会社でも横領事件とか起きてますよね。沢山の人が横領事件とか起きてて、アメリカなんかは人事担当者がみんな依存症の教育受けたりするんですよ。私はそのアメリカの介入の勉強しに行ったときに、横でみんな、人事の担当者が研修受けてるところ、こうやって覗かせてもらったんですけど、なるほどな、これは必要だよっていう、だから、そういうような、地域による連携っていうも

のが出てくると、すごくありがたいなっていうふうに思っています。依存症っていうのは、本当にギャンブル依存症とかとは、多くの方たちが誤解されていると思うんですけども、やっぱり私は今、みなさんに伝えたいのは、私は依存症になってよかったと思ってるんです。で、それによって、生き方を変えることもできたし、こんな面白い人生が与えられたっていうふうに思ったときに、それは、今、誰かの手助けをしていくような、こんな生き方に変えることができたのが依存症になったおかげだっていうふうに思っています。だから、むやみにやたらに依存症のスティグマを強めるような、発信の仕方っていうのはやめてもらいたいっていうふうに思ってるし、それは私たちの気持ちを忖度した迷惑でしかないんです。で、それはやめてほしいっていうふうに思ってるし、きっちりやる、しっかりやる、必ずやりますみたいなことを言っても、内容がわかんなければ、内容のわからない人たちの作った法案っていうのは、役に立たない。実際役に立たなくて、じゃあIR蓋を開けて、自殺者が連チャンしましたよ、バンバン死にましたよってなったときに、みなさんどうするんですかっていうことになりますよね。集団訴訟とか絶対あると思いますよ、これから先。私もそういうふうに言いますから、これだけ後発の産業が起きるっていうことになるわけですから、っていうふうになっていくって考えたときにやっぱりきちんとしたものを作るっていうこと、それには私たちは別に責めたりしないし、みなさんの思ってるように思ってる訳じゃない、話し合いたいと思ってるんだっていうことを、今日、皆さんの中にご理解していただけたら、この調子でまくし立てるので、あのおばさん怖いと思って逆効果になってないことを願っております。ありがとうございました。